

土木行政叢書「水利權、河水統制編」 を讀過して

大 和 田 生

水の利用は新東亞建設の途上最も重要な役割であることは言ふまでもないことである、特に我日本に於ての水力電氣事業の如き折角國家管理の下に日本發送電株式會社を結成して電力の豊富と使用料の低廉とを期待せしめられたのである。然るに濁水の爲とはいふものゝ水の統制完全ならず火力の資料である石炭は缺乏を告げ電力國家管理に對する期待に背くことの少からざる現象を見るに至つて頗る遺憾の念に打たれたことは昨今の出來事である。

内務省土木局に屬官として又事務官として久しく河川行政の實務に従事せられ、發送電會社の創立なるやいち早く同會社の重要な椅子に轉ぜられた安田正鷹氏が執筆せら

説 苑

れたる此叢書は其の記述する所、また他に求むること能はざるものゝあるは敢て説明を要しないのである。執筆者の執筆の心構や其苦心の程は土木行政叢書月報第二號に依つて知られ得る所である。予の如き著作に縁遠きものが到底想像し得られざる所であらう。夫れはともかく安田氏の前著述「水利權」「河水統制」を讀まざる者に取りては本書から水の法と其の適用とに關し適正なる知識力を與へられ更に多分前著述には見られざることゝ思はるゝ國家管理に屬する發電水利使用(第三章)の題下に電力の國家管理、電力管理法、日本發送電株式會社法、同會社の水利使用、水利權の移轉電力國家管理と河川行政との關係等を一六七頁乃

至一八〇頁の一四頁に涉りて詳述せられたる點については感謝の心を新にするものである。全巻を通じて讀者に對し大なる啓導を興ふことは獨り予等のみの感想ではなからう、水の行政に關係ある者は必らず一讀すべき良書たるを信ずる、乍然執筆者自ら披瀝せらるゝ如く帝大助教田中二郎氏が、會てもう少し書かねばならぬところが残つて居るとの評言は予も亦同様の感なきを得ない。例へば水の使用特許に際して多摩川々水使用に付き法理上事實上特殊關係ある東京市の意見に對して、諮問の答申は行政處分上單に參考に供するに過ぎざるものとして論斷し得ざる關係ではなからうか、其の水源涵養の施設、水の保護方法、水利權獲得の沿革等に思を致すときに一段の評論を要求せざるを得ないものがある。又河水統制に關し三重縣宮川の上流地點に於て、船津村に隧道に依る統制を施せば其の發電力は相當大なるべきものがあらうが、水系を變更せざれば實現し得られない難問がある。此の如き關係に在る河川は尙他地方に存在するであらう。斯る場合に於ての解決は如

何であらうか若し夫れ十數年前故田尻稻次郎博士の著「地下水論」に述べられたる所を以て本書の「地下水の統制」を視るときに聊か物足らざるの思がする、他日必らずや執筆者は改めて吾人に啓導の筆を執らることあるべきを信じ且其速かならんことを希ふ次第である。

初夏漫吟

田中野狐禪

遠富士の低く小さし巖
五月經登朝の子の歸省かな
初聲の高々とあり明易き
窓鎖して人居ぬ態や薦若葉
酒桶を干し槽に浸り菖蒲の香
首ツたけ湯居一路若葉かな
一の鳥居一の鳥居深く空の色
青風や杉むら深く空の色
放ちたる鶏たけり柿若葉
一葉雨板碑に古きみ寺かな
若葉雨板碑に古きみ寺かな
一輪となりし牡丹の崩れたり
江戸太郎を弔ふ人等若葉雨
(正誤)
三月號「濃から」は「濃かり」、四月號「乳ほと」は「乳ほそ」、六月號「温泉ほと」は「温泉ほてり」の誤植